

わたしのグランプ

筒井康隆



わたしのグ

井康隆

わたしのグランパ

平成十二年八月三十日 第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者 筒井 康隆

発行者 和田 宏

発行所 株式会社 文藝春秋
〒101-8008 東京都千代田区紀尾井町三-二三
電話代表 〇三-三二六五-一一二一

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

© Yasutaka TSUTSUI 1999 Printed in Japan
ISBN4-16-318610-7

万一、落丁、乱丁の場合は送料当方負担でお取
替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

わたしのグランパ

装画 福井真一
装丁 石崎健太郎

珠子が「圀圀」という文字を見たのは八歳の時で、その時はまだ祖母が家にいた。「父は圀圀の人であり」という文章は父の日記の中にあった。つまり珠子は父の日記を盗み読んだのだが、その時その自覚はなく、両親の寢室の隅にある父の机に置かれていた革表紙の本を何気なく開いてはじめて日記と知ったのだった。

父が「父は」と書いているのだから、それは祖父のことに違いなく、難しいこと

ばかりが書かれていて判読不明の文章の中からその部分だけ眼にとまったのは、珠子が祖父の不在を気にかけて続けていたからだったろう。

圀圀とは何かを知りたかったが、どう読むかも知らずに辞書を引く術を珠子はまだ知らず、辞書を引くことすら思いつかなかった。ひとの日記をこっそり読んだ行為がまさか褒められる筈はないので父には訊けず、その文字をノートに書き移し、翌日珠子は新橋先生に見せた。

「先生。これ、どう読むの」

「難しい字を書いてきたわね」担任の新橋先生は自分が試されているように思いでもしたのか、すらすら答えてくれた。「レイゴ、本当はレイギョと読むんだけど、普通はレイゴよ」そう言ってしまっただけから、彼女はまるでその語の意味にようやく思い当たったようなうしろめたい表情をした。

「どういうこと」

質問する珠子に、先生はひどい近眼の眼鏡の奥から猜疑の眼を向けて訊ね返した。

「こんな字、どこに書いてあったの」

「教えない」

初老の新橋先生はいつもの意地悪な顔になってにやりとした。「じゃ、先生も教えてあげない」

「けち」

その字をどこで見たのかと、それ以上突っ込まれては困るので、珠子はそう言い捨てて教室から走り出た。国語の授業が終って、級友は全員運動場へ出ていた。国語の成績のいい珠子は新橋先生のお気に入りだったので、乱暴な言葉づかいや多少の甘えも許されていたのだ。

今は読み方を知った「圀圀」の意味が、珠子は知りたかった。性格とか生まれ育ちなどによる人間の種類を表現したものなのか、職業なのか、場所なのか、文脈からはどうにでも考えられた。

珠子の父の五代恵一は一流と言われる国立大学を出たあと、中堅の電気工業株式

会社でまだ若いのに課長を務めていた。四人いる営業課長のひとりで帰宅は常に遅く、土日以外珠子は父と夕食を共にしたことがない。平日は朝も顔を合わすことがなかった。珠子の小学校は走って二分の場所にあり、都心部の会社まで五十五分かかる恵一より遅く起きていいのだった。

「圀圀」などという難しい語を、祖母はおそらく知るまいと思ったし、あまり仲のよくない母の千恵子よりは、父に直接訊ねようと珠子は思った。日記を読んてから一週間以上経ち、うしろめたさも薄らぎつつあったのをさいわい、彼女は日曜日の夕食後、家族四人がくつろいでコーヒーを飲む習慣となつてゐるその時間に、「お父さん」と、父に呼びかけた。小学校にあがつた時から珠子は「パパ」という呼称を禁じられていた。

恵一は夕食時にウイスキーの水割りを四杯飲んで少し酔つていたが、圀圀の人はどういふ人のことかと娘から問われ、たちどころに自分の日記が読まれたことを知り、急に酔いが醒めた。娘に読まれる予感がなんとなくあつて、さほどの自覚も

なく「圀圀」という難しい語を使ったのかも知れなかった。

「おれの日記を読んだな」黒縁眼鏡をかけた呑気そうな顔のまま、恵一は娘を睨みつけた。

珠子は父が怒っているのではないことを知っていた。父はたいていのことを許してくれたからだ。怒ったふりをして時間稼ぎをしているのだ。だとすると、やはり圀圀とはよくない意味を持つことばに違いない。

「お父さんだって、わたしの日記を読んだじゃない」

「あのなあ」父は笑った。「それは違うだろう。お前の絵日記は学校の宿題だろうが。これでいいかって、お前の方から見せに来たんじゃないか」

「圀圀の人って言うのはね、気むずかしくて扱いにくい人のことよ」母が無表情のままぶっきらぼうに言った。それでも美しい神経質そうな顔が少し引き攣ったようだ。

父が、ほっとしたような顔をした。

「本当」と、珠子は父に確認した。

「本当だ」と、父は言った。

嘘だ、と、珠子は思った。

「あの人のことだね」祖母の操がやりきれぬという様子を見せた。「やめて頂戴。そんな話なら、わたしは寝るわ」

祖母が立ちあがり、父と母も立って、その話題はそれきりになった。

祖父の謙三は珠子が物心ついた時から家にいなかった。家族や親戚は祖父の行先を珠子に隠しているように思われた。

「今は南米にいる」

「ええと、東南アジアのどこだったかな」

「たしか、香港だって聞いたわよ」

誰それに聞いたたび、その答はまちまちだったし、いい加減なものだった。しかし珠子はもうとくに本当のことを知ってもいい年齢になっていたのだ。周囲の大人

たちもそれを知っているながら、真実を知った珠子の驚きを見るのがつらさに先送り、先送りしていたのだろう。

五年生になった時珠子は、ふと思いついて「圀圀」を国語辞典で引いてみた。それまでは、中学生の使うような辞典に、そんな難しいことばが載っている筈はないと思っていたのだ。だがそこには、さまざまに想像していた中でもいちばん悪い意味を持つことばとして、ちゃんと載っていた。

れいご 圀圀 ろうや。獄舎。▽正しくは『れいぎょ』

「刑務所にいるのかあ」

道理で、祖父から一度も手紙が来なかった筈だ。家族とは手紙のやりとりをしている筈だから、刑務所から来た手紙が自分の眼に触れないよう、親戚の誰かの家氣付で送られてきていたのだろう。推測していたことでもあり、珠子はさほど衝撃を

受けなかった。それよりも、圀圖の意味を知った今となってたちまち気がかりになったのは、いったい祖父がどんな悪事を働いたのかではなく、祖父がいつ帰ってくるのかということだった。間もなく出所して家に戻ってくることは間違いないかった。親戚の集まりや、名古屋から父の弟の鱒二叔父が来た時などには祖父のことがしばしば話題となり、隣室などで聞き耳を立てている珠子にも「あと四、五年だろ」「いや、三年くらいで帰ってくるんじゃないの」という囁きが伝わってきた。そんな時いつも祖母だけは、身をふるわせているかのような大声で「ああいやだいやだ」と嘆くのだ。

祖母の操がなぜ夫を嫌うのか、あるいは怖がるのか、それは以前の母のことばなどから容易に想像できた。きつと気むずかしく、扱いにくい老人なのであろう。アルバムの写真で見る謙三はまだ若わかしく、どちらかと言えば甘ったるい整った顔をしていて、とても気むずかしそうには見えないのだが、珠子に対してはどうなのだろう。初めて逢う孫娘を祖父は嫌うだろうか、可愛がってくれるのだろうか。大

人から生意気だと言われることの多い珠子に、祖父から好かれる自信はあまりなかった。

2

珠子は、十三歳になり公立中学の一年生になるまで、自分が祖父の所在を知っていることは家族の誰にも黙っていた。十年以上もの刑期を務めたのである以上は、祖父のしたことが相当の悪事であったことにまず間違いはなく、そんな祖父がいずれは家に戻ってくることを、誰もが気にしていることも確かだったし、自分が真相を知っていることなど教えて、家族にそれ以上の気遣いをさせたくはなかったのだ。さらに珠子には、祖父のことばかり気にしてなどいられない多くの問題が起っていた。ひとつは中学校へ入るなり珠子に降りかかってきたいじめだった。小学校でも一緒だった木崎ともみが、数人の同級生と作ったグループのリーダー格となり、

珠子に何の思い当たる理由もないまま、彼女へのひどいじめを始めたのだ。

悩みといえば、その公立中学における男子生徒の校内暴力もずいぶんひどく、それはしばしば授業ができなくなるほどの騒ぎにもなったりして、珠子に登校意欲を失わせるのはむしろ彼ら男子生徒たちだった。彼らによる学園の荒廃が、木崎ともみたちの行為の背景にあることも確かであつたろう。

もうひとつの珠子の悩みは父母の不仲だった。母の千恵子は数年前から無気力になり、無感動になり、突発的な激怒の発作を起しては夫や娘に八つ当たりしていたのだが、それがますますひどくなってきた。その原因というのが、それがまた珠子のもうひとつの悩みとも言うべき、一年ほど前から始まり、次第に度を越すようになってきた地上げ屋と称する暴力団の嫌がらせにあり、それに対して何の対処もできない頼りない夫への苛立ちによるものでもあることは、珠子の眼からも判然としていた。寝室での父母の言い争いは同じ二階の珠子の部屋にも毎夜のように届き、祖母もどうしてよいかわからぬ様子だった。

「わたしはあんな暴力団の嫌がらせなんか、何とも思わないんだけどね」ある日祖母が、珍しく珠子に声をひそめて話しかけてきた。「あの人が帰ってきて、あの連中とまた大喧嘩始めるんじゃないかと思うと、想像しただけで全身にふるえがくるよ」

珠子は「おばあちゃん」と呼ばれることを嫌う祖母にいつも「グランマ」と呼びかけていた。「グラランド・マザー」の略称のつもりだった。

数日後、珠子は祖母に訊ねた。「ねえグランマ。おじいちゃんって、喧嘩、強い」

祖母は眼を剝いた。「やめとくれ。やめとくれ。わたしに何を言わせようってんだい。わたしは知らないからね。わたしやもう、何も知らないんだからね」

そしてそんな情況下、二学期が始まった秋のある日、祖父の謙三が刑期を終え、出所して自分の家に戻ってくるという知らせがあった。世帯主はまだ謙三だったのである。

珠子が学校から戻ったのは、美術部のデッサン実習が終ってからだったので五時を過ぎていた。土間と玄関の間に荷造り途中の荷物や茶簞笥や小型テレビや机などが雑然と置かれていた。いずれも祖母の部屋にあったものだ。「何、これ」

「おばあちゃんがさ、鱒二叔父さんのところへ行くの」祖母の部屋から本を運んできてダンボール箱に詰めながら、母が投げやりにそう言った。

「えー。グランマ引越すの。なんで」

「おじいちゃんが明日、帰ってくるの。今日連絡があったの」

「グランマ、おじいちゃんから逃げ出して名古屋へ行くの」

「嫌いだからね」

「そんなに」

台所へ行くと祖母は何やら呟きながら自分の食器類を選り分けていた。「グランマ行っちゃうの」

「ああ。珠ちゃん。あんたとお別れするの、ほんとにつらいけどね、だけど、あの